

便座のふたの上には腰を下ろし、見入る。消  
 可。  
 休んでいよいよと、なぐさめる。不思議なみ  
 し耐える。と説教をし、時には、もう少し  
 一体何が、もうさし、なのか。もう少  
 が私の中で、うごめく。みみずのような文字  
 た当初は読めなかつた。みみずのような文字  
 うすいか細い線を指の腹でなでる。見つけ  
 っもうさし、  
 壁を見る。  
 友達とめたから。戸を閉め、カギをかけ、  
 行きつけの個室へ足を運ぶ。今日は部活で  
 私の、オアシス。  
 の空間。人間の欲求を排出する部屋。それが  
 感じる人の気配に落ち着けない。私一人だけ  
 と同じ場を共有する所。いつでもどこでも、  
 私のオアシスとなる。学校とは必ず、誰か  
 授業前、昼休み、放課後。トイレの個室は  
 人の声より、安心するものがある。

えゆく想い。持ち主は誰だろう。

卒業直前の「もう少しこの場にいたい。」願

いが生みの親かもしれない。私の砂漠に湧き

出た文字。広がる可能性の中の不変。それは

息をしいる落書きだといふこと。

もし「もうすこし」と言われたら。ただ風

かす水違うだけ。私の中でみみずは生まれた

い。

見つめる。見つめられる。「もう少し頑張

ってみて。背中を押さ水、私の手はトイレの

戸を開けた。

いよいよ私もトイレとさうばい。

こもる。小さな穴の開いたポットからシヤ

しアップニシル。次のオアリス利用者へ。

「うん、もう少し。」